

〔翻 訳〕

『スペクテイター』(62)

—第590号から第599号—

門 田 俊 夫

第590号 1714年9月6日(月曜日)

【アディソン】

時そのものも、さながら流水のように、たえず動きながら推移する。というのは、流水も光陰も、静止するということができないからだ。ひとつの波は、ほかの波に押しやられ、たがいにあとから来た波に流されつつ、さらに前を行く波を押し流していく。これと同じように、時も逃げ去り、たがいにつながり、たえず更新されていく。

(オウイディオス)¹⁾

つぎの論考の書き手は「無限」の随筆の作者と同一です²⁾。

私たちは無限の空間を境界のない広がりと考えます。永遠つまり無限の持続を始まりも終わりもない一本の線と考えるわけです。無限の空間について思索するとき、私たちが存在しているこの特別な場所をすべての広がりを中心に位置していると考えます。永遠についての思索では、私たちに与えられている時間を一本の線を二分する中間時点と考えます。このため、多くの聡明な著者は現在の時間を大きな広がりの中真ん中に浮かび上がる双方に果てなく広がっている地峡になぞらえます³⁾。

哲学そして実際には常識は必然的に永遠を二つに分割して考えます。これは言ってみれば、過ぎ去った永遠と来るべき永遠ということになります。「これまでの永遠」と「今後の永遠」という学問的な言い方が読者には興味深いかも知れませんが、「過ぎ去った永遠」と「来るべき永遠」の方が分かり易いと思います⁴⁾。これらの永遠はそれぞれ境界、つまり、前者には終わり、後者には始まりがあります。

来るべき永遠については次回に譲ることとして、まず過ぎ去った永遠について考えるこ

1) オウイディオス『変身物語』15.179-85

2) 第565号, 571号, 580号参照。

3) カウリーのピンダロス風頌詩「人生と名声」(エドモンド・ウォラー編『詩集』202-3頁)。

4) カウリーは「永遠」には「過去」と「将来」の2種類があると語っている(エドモンド・ウォラー編『詩集』187頁)。

とにします。この永遠については人の心では全く想像がつかえません。理性ではそうであったと分かるのですが、同時に、不合理と矛盾に満ちた大変なものであることとしか描くことは出来ません。過ぎ去った持続については、それらがかつて存在したこと以外には分かりませんし、かつて存在したことが何であっても、私たちとは一定の隔たりがあります。そして、一定の隔たりがあっても、さほどかけ離れていないものは、永遠とは言えないのです。過ぎ去った持続という考え方そのものは、かつて存在したということを示しているのです。かつて存在したという考えは実際には過ぎ去ったという考えに包含されるからです。それゆえ、これは人間の悟性では測ることが出来ない深淵なのです。私たちは永遠があったと確信しますが、永遠を私たちが推し量ることが出来る考え方で測りますと矛盾したことを言うことになります。

この問題を探究しますと、永遠についての考えで遭遇する困難さはつぎの唯一つの理由から生じていることが分かります。つまり、持続については私たち自身およびその他の被造物が現に存在しているといったことからしか推し量ることは出来ないのです。連綿とした持続は過去、現在、未来で構成されます。かつて実際に存在し、その結果ある年月を経て到達しなかった存在といったものは何一つありません。私たちは好きなだけ上昇できますし、何百万年もかけて来るべき永遠に備えることも出来ます。そして、私たちは決して持続の源泉、永遠の始まりに達することは出来ません。しかしそれでも、かつて存在したものが何であれ、おそらく十分に寄せ集めることは不可能ですが、多くの人々の手の届くところにあるのは確かです。無限の持続がかつて存在しており、また、決然と隔たっていないように、私たちから一定の隔たりのない何物かが無限の空間に実際に存在しているかも知れないと言っても差し支えありません。双方の隔たりは私たちの能力では測ることも出来ず、不明瞭であるかも知れませんが、理性ではそれ自体さほどの隔たりがあるとは思われません。そのため、ここに人間の悟性では克服できない困難さがあるのです。何物かが永遠から存在したに違いなく、同時に、存在の概念によって、存在している物が永遠から実在したのは確かです。

自分でこういった考えをしない読者にとっては、このような難解な思索について行くことは困難ですが、私としましてはさらに進めます。なぜなら、これは神の存在と永遠についての例証的な論点だと考えるからです。この偉大なる真実に導く論証は数多くありますが、洞察力と理解力に優れた人たちが力説し、懸命にその検証をしている人たちにとって決定的と思える理性がそれとなく提示している証拠を棚上げすべきではないと考えます。

こうして私たちに可能な限りの考えにしたがって過ぎ去った永遠について考えて來ましたので、これからは理性が指示し、この点に関する哲学者の信条と考えられているいくつかの項目を取り上げたいと思います。

第一に、いかなる存在も独自に存在することが不可能なのは確かなことです。もしそれが可能であれば、その存在はそれ以前に行動していたに違いないからです。これは矛盾します。

第二に、したがって、ある存在は永遠から存在したに違いないということ。

第三に、被造物にならって、つまり、実在についての私たちの考えによって存在しているものはすべて永遠から存在することは不可能であったこと。

第四に、それゆえ、この永遠の存在は自然の大いなる創造者、つまり、限りある被造物とは完璧さの点で大きく隔たりがあり、被造物とはまったく異なった彼らに思いもつかない形で存在している「日の老いたる者」⁵⁾に違いないこと。

あらゆることに精通していると考えられる哲学者たちが、あらゆる瞬間に無限の持続を感得するのだと言って、神の存在の仕方を説明しているのを承知しています。神の場合は、永遠は不動、つまり、良識的には無限の瞬間なのです。神の存在は過去とか未来とは無関係です。聡明なカウリー氏は天国についてつぎのように述べています。「来るべきものも過ぎ去ったものも何もない。常に永遠の現在が続いているだけです」⁶⁾と。

私自身のことを言えば、こういった主張は被造物には結びつかない言葉だと思います。そして、人々は高度な教義を求めるよりも自らの無知を認めた方がいいと考えます。そうすることで、無を知り、自己矛盾を知るのです。限りない栄光と完璧さに囲まれており、存在の源泉つまり私たちおよび全被造物がよって立つ全存在の泉である神について黙想するとき、その探求においてはどれほど謙虚になってもなりすぎることはありません。それゆえ、ある存在が必然的に永遠から存在していたに違いないように、存在は私たちの存在に対する考え方通りに存在していることはあり得ませんので、実際には理解不可能な方法で存在しているのだということをこの上なく謙虚になって認めなくてはなりません。理性が教える神の存在についての説明では、啓示がそれを裏付けてくれます。神は昨日も今日もこれからも変わらず同じであることを教えてくれます。神は初めであり終わりであり、千年は一日であり、一日は千年なのです⁷⁾。そのことおよび類似の言い方によって、神の存在は、時つまり持続について、被造物の存在とは全く別物であり、その結果、私たちは神の存在に対して適切な概念を持つことは出来ないのだということが分かります。

神は自身の存在についての最初の啓示で、「わたしは、有って有る者」と言い、モーセがバロのところへ行ってその名を何と聞いていいかと尋ねますと、「『わたしは有る』というかたが、あなたがたのところへつかわされました」とモーセに言われます⁸⁾。私たちの大いなる創造主は、この啓示によって、ある意味ではほかのすべてのものを実際の存在から排除し、自らを実際に存在する唯一の存在として、被造物と区別しています。永遠についての思索から導き出された古代のプラトン派の考え方は、神が自ら示した啓示と驚くほど一致しています。彼らが言うには、私たちの言う存在は過去と現在と未来を繋ぎ合わせたものであって、実際に存在するものは何もないということです。こういったはかなく経時的な存在は、存在そのものというよりはむしろ存在の影であり、影に似たものなのです。厳密には、存在が完全に現在のものだけが存在しているのです。つまり、言い換えま

5) 『ダニエル書』第7章第9, 13, 22節。

6) カウリー『ダビデ讃』1.361-2

7) 『詩篇』第90章第4節。

8) 『出エジプト記』第3章第14節。

すと、この上なく完璧に、私たちには分からないように存在しているものだけが存在していると言えるのです。

本日の思索は一つの有益な推論で締め括りたいと思います。限りあるものたちがその存在を理解する言葉に言い表せない善と英知を考えると、私たちは創造主の前にいくらひれ伏し跪いても十分とは言えないのではないのでしょうか。創造主に不必要な生き物にまで存在を適応させている溢れんばかりの善意とは一体何なのであろうか。神自身がそれまで存在と幸福を完全に手に入れており、永遠を十二分に享受していたことを考えますと、とりわけそのように思えます。人間は無から呼び出され選別された自分のことをどのように考えたらいいのか。人間は意識と理性を持った幸福な生き物、要するに、驚嘆、賞賛、および崇敬に飲み込まれずに、存在を共有し、ある意味で永遠を分かち合うものとなったのです。実際、これは人の考えにはおよばない問題であり、言葉で表現するというよりはむしろ密かな献身と魂の静けさでもって受け止めるべきことです。神は私たちにこの言葉で言い表せない善意を激賞および称えるに十分な力つまり能力を付与なさっておられないのです。

しかしながら、私たちが不可能なことに絶えず取り組んでいること、また、完成することが出来ない仕事があるにもかかわらず永遠の仕事だというのが、私たちにとって若干の慰めとなっているのです。

第591号 1714年9月8日（水曜日）

【バジエル】

恋は楽しいテーマだ。(オウイディウス)¹⁾

このほど、ある紳士から手紙を貰いましたが、最近恋について語った紙面がなくなっていることを非常に気遣っています。恋のテーマはうまく扱いますと、必ず男女両性から好評を博すという訳です。

そこでこのテーマでの私の創案が尽きているのでしたら、恋の詭弁家としてお役に立ちたいとの申し出をこの紳士から戴いています。彼は、このポストについて、自分はこの情熱を主要な研究分野としており、15歳から49歳までさまざまな様態を観察して来たので、十分な資格があると考えておられます。

彼の真の能力から生じているものと期待しますが、色恋沙汰で生じ得る大半の微妙で複雑なケースについて、自分は当事者双方に必ず満足のゆく判断を下すと自信を持って請け合っています。

たとえば、相手の手を握りしめるには指先をどれだけ縮めなくてならないかとか。娘あるいは寡婦からの完全な拒絶をいかに捉えたら適切であるかとか。恋人の扇で肩をポンと叩かれたら何と言いつついいかとか。初めて顔を合わせた婦人が謙虚な奉仕者に手に

1) オウイディウス『哀歌』3.3.73

キスをさせてくれるかどうかとか。恋人とうまくやっていくために、娘をどの程度抱擁することが許されるのかとか。どんな笑みを浮かべたらいいのか、また、どんな場合に洗面をしても無駄だとか。どんな場合におどおどした表情が役に立つかとか。

彼はまた、腕前のさらなる証拠として、恋についての金言をいくつか送って来ています。これらは長期間にわたる深遠な熟慮の結果であると請け合っています。そのうちのいくつかは他の著者も取りあげていないものと思いますので、みなさんにお伝えしたいと思います。

世の中には、憎しみよりも恋から生じる苦難の方が多い。

恋は怠惰の娘であり、不安の母である。

(サー・フランシス・ベーコンによると) 真面目な人たちが最も志操堅固である。同じ理由から、女性よりも男性の方が志操堅固であるべきである²⁾。

陽気な人はとても多情で、生真面目な人は忠実である。

男たらしは美德を守るがしばしば評判を落とす。

恋は男性の振舞いを磨くが、女性の振舞いを滑稽なものにする。

恋は一般に、若いときには善意、中年では利害、老年では名状しがたい情熱が伴う。

衰えかけた情熱を蘇らそうとすると、一般に、その残滓を消してしまう。

ふしだらな女性はきちんとし過ぎ、きちんとし過ぎる女性はふしだらになる。これは色恋沙汰では確かなことだ。

この紳士の腕前については折を見て利用したいと思います³⁾。恋のテーマについては今後も取り扱いますので、本日の紙面は最近未知の人が送ってくれた詩で締め括りたいと思います。この詩には通常のソネット詩人より優れた点があると考えます⁴⁾。

著者によると、この詩は絶望に駆られたときに書いたものだとのことです。恋人にしてみれば、自分自身がコリンナだと分からないうちに、彼が述べる情熱に同情を寄せてくれるのではとの希望を抱いているのが分かります。

愛に溺れた男よ、強い疼きを隠しなさい。

あなたの心に火をつけたコリンナに語ってもいけない。

嘆いても無駄だし、彼女に哀れみを求めても無駄だ。

彼女は立派過ぎて、応じることはない。

奇麗過ぎてあなたの情熱を消すことはできない。

2) サー・フランシス・ベーコン「結婚と独身について」。

3) 第602号, 605号, 607号, 614号, 623号, 625号参照。

4) ユースタス・バジエルの弟ギルバート・バジエルが書いた詩は元々セオフィラス・シバーの『詩人たちの生涯』(1753)に端を発したとのこと。セオフィラスは劇作家・桂冠詩人コリー・シバーの息子。

密かに思い焦がれるのです、そして、黙って驚きながら、
 抗し難い彼女の眼差しを飲み込むのです。
 遠くから歎き悲しむのです。
 静かに苦しみ、決して救いを求めてはいけない。
 焼き尽くすような状態を露わにして彼女の嘲笑を誘ってはいけない。
 とにかく当惑した状態で、彼女の嫌悪を避けるのです。
 あなたの愛しい人がさほど称えていないより幸せな若者を
 祝福する様子を見ても、甘んじて受け入れなくてはならない。
 あの素晴らしい姿と心を持った人は、あなたが見つかる
 無数の美人を逃すことになる。
 想像力の乏しい人は、彼女が自分の腕の中に飛び込んでくる
 さまを半ば夢見ながら、彼女の魅力に近づいていく。
 彼女はあなたの高潔な情熱を知らないし、知ってもいけない。
 彼女そして詩神たちがそれを吹き込むのです。
 彼女の姿だけがあなたの胸の中に宿り、
 虜となったあなたの魂は喜びの面持ちで満たされる。
 夜はあなたの夢を、昼間はあなたの思いを導くのです。
 決してあなたの胸から逸脱してはいけない。

第592号 1714年9月10日（金曜日）

【アディソン】

才能の豊かな鉦脈がない研究。（オウイディウス）¹⁾

私は劇場をそれ自体の世界と考えます。現代の多くの悲劇に崇高さを与えるために、劇場は最近、新しく雷などの大気現象を備えることで、中心領域を完成しました。昨年の冬、私は新しい雷の初めてのリハーサルに立ち会いました。この雷鳴はこれまでのものよりはるかに強力で堂々としていました²⁾。劇場には雷をとてうまく真似るサルモネウスのような人がいます³⁾。稲光はこれまでのものより勢いよく光りますし、雲も素晴らしくそれらしくふんわりとしています。『嵐』のために考案された大きな箱に閉じ込められている暴風のことは言うまでもありません⁴⁾。大量の雪も用意されています。私が聞いている限り、この雪はわざとらしくカットされた駄作の芝居のためとのことです。ライマー氏のエドガーは、つぎのリア王の公演で、この不運な王の悲しみを高めるといふか和らげるために雪の中で倒れ、この著名な批評家が批判する芝居に飾りを施すことになっています⁵⁾。

1) ホラティウス『詩の技法』409

2) 劇場の雷については、第235号で言及された。

3) ウェルギリウス『アイネイス』6.787

4) 『嵐』は、パウウェルがプロスペロ役で、6月4日にドゥルーリー・レイン劇場で上演された。

本当のところ、私は、一般に批評家という名で知られている人たちに対して役者たちが公然と敵対することを不思議とは思っていません。なぜなら、不出来だということだけでなく、人気があるということで、紳士たちがその芝居を非難するのが習わしとなっているからです。中にはロングランになる上演は必然的にろくでもない作品だという金言を定めている人たちがいます。それはまるで人の意に適うことが詩歌の第一の規範ではないと言っているようです。このルールが妥当であるかどうかは、私よりも優れた批評家の裁定に委ねたいと思います。もし妥当であるとしたら、それはこのルールを打ち立てた紳士たちの誉れだと思います。3日間連続して上演されるという恥をさらしている作品は数少なく、大半は実に素晴らしい出来ですので、町の人たちは一夜の観劇で済んでいます。

私は、ギリシアではアリストテレスとロンギノス、ローマではホラティウスとクウィンティリアヌス、フランスではボワローとダシエールといった批評家を高く評価しています。しかし、わが国で自称批評家として身を立てている人たちの中にとっても愚かな人がいて、簡潔つまり適切にまとめる方法が分からず、同時に教養がなく学問的言語を理解せず昔の著者の二番煎じでしか批評しない人たちがいるのは残念なことです。こういった人たちは、自分の考えからではなく、他人が書いたことから判断します。権威づけて発する言葉の一致、行為、感情そして言い回しによって、彼らは理解できないために洞察力があると信じがちな無学の読者の中で異彩を放つのです。古代の批評家たちは同時代人から大きな賞賛を浴びています。彼らは無教養な人たちの気づかない美点を見出し、しばしば、著名な著者が犯す小さな間違いや見落としを言い繕い弁明する理屈を発見します。それに対して、わが国の批評界の生半可な人たちの大半は、喝采を浴びる新作をけなし、評価を下げることに専念します。架空の欠点を見つけ出し、名高い作品の美点を欠陥と誤謬だというこじつけの主張をして証明する訳です。要するに、こういった批評家の著述を古代の人たちと比較して見ると、詭弁家と古代の哲学者の仕事を比較するのと同じことが言えます。

妬みとあら捜しは怠慢と無知が生み出す自然な産物です。このことはおそらく、異教の神話で、モモスが夜と眠りの神であるノクスとソムヌスの息子だとされたことにその根拠があったのでしょうか⁶⁾。自分で成し遂げるあるいは際立とうと努力しない怠惰な人は、往々にして他人の誹謗をすることになります。無知な人が自分たちの分からない名高い作品の美点に左右されるのと同じことです。批評家という名で威厳を付けているわが国のモモスの息子の多くは、この二人の有名な先祖の正真正銘の末裔です。彼らはしばしばこういった馬鹿げた言動に陥ります。彼らは、第一にルールを固守するよりもルールから逸脱したときの方が時にはより素晴らしい判断が出来るのだということ、第二にルールを知っているだけでなく誠実に守っている才能に恵まれない人の作品よりもルールを全く知らない才人の作品の方により多くの美点があるのだということを考えないで、日々人々に訓示を垂

5) トマス・ライマー『エドガー、またの名はイギリス君主』(1678)。トマス・ライマー(1641-1713)は、シェイクスピアを酷評したことで知られている。

6) モモス(あら捜し屋)は、ノクス(夜に女神)とソムヌス(眠りの神)の息子。彼は思ったことを自由に口にする自由の神であった。

れているのです。

まず、巧みな書き方のルールを十分に分かっていながら、特別な場合にはそれから逸脱する人たちのことが目に留まることがあります。この点で分別があり、ルールを守るよりも高度な美点がある時には、確立している劇作のルールからわざと身を引いた古代の悲劇作家たちの中から例を挙げることが出来ます。古今を問わず、最も気高い建築物や彫像を調べたことがある人々は、巨匠たちの作品にはしばしば逸脱があつて、正確無比な作り方よりもはるかに大きな効果を生み出していることが十二分に分かっています。これはしばしばイタリア人の言う「風格」から生じるのです。言ってみれば、これは著作の「崇高さ」に繋がります⁷⁾。

つぎに、わが批評家諸氏は、ルールを知っていてそれを守っている才能に恵まれない人の作品よりも、ルールを知らない才人の作品の方により多くの美点があることに気づいていません。当時の取るに足らないわざとらしい揚げ足をとる人たちに対抗して、テレンティウスは才人たちを挙げて、「この作者を非難するということは、とりもおさず、ナエウィウスやプラウトゥスやエンニウスといったわれらが作者の模範となっている方々を非難しているのと同じこと」⁸⁾だと述べます。批評家というものは、芝居が不首尾に終わったとき、サウス博士が医者患者が亡くなるときに、彼は「規則に従って」⁹⁾亡くなったというのと同じような慰めを抱くのかも知れません。われらが比類なきシェイクスピアはあらゆる詩歌の種を持って生まれたのであり、プリニウスの言う、技巧の助けを必要としない自然に生み出されるアポロと9人女神の化身であるプリニウスの指輪の石に例えることが出来るかも知れません¹⁰⁾。

第593号 1714年9月13日(月曜日)

【バイロム】

このように夜の森を進む旅人たちは、月のおぼつかなく
危険な光の中をさ迷う。(ウェルギリウス)¹⁾

わが夢見る寄稿者シャドウ氏が2度目の手紙をくれて、夢全般に関する好奇心をそその意見と夢を活用する方法を述べています²⁾。この手紙の抜粋は読者に気に入って貰えるものと考えます。

7) アディソンは『イタリア紀行』で、ローマで見た古代の柱の見せかけの不均衡についてコメントした。

8) テレンティウス『アンドロス島の女』前口上20-21行。

9) ロバート・サウス「ウェストミンスター寺院での説教(1684-5, 2月22日)」。

10) プリニウス『博物誌』第37巻「宝石」。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』6.270-1

2) 第586号参照。

私たちには時間を無駄にする暇はありませんので、睡眠中の架空の出来事をそれがただ単に覚醒中の瞑想よりも現実味がないという理由で、吟味しないで放置しておく理由が私には理解出来ません。実際の道が書き込まれていない地図の道順を見下す旅人は、そこでは町の代わりに点、市の代わりに暗号となっていて、2, 3インチ進むにも長時間かかるに違いないと思うために、自分の判断に疑いをもちます。夢の中での空想は田舎の風景のような別の人生風景を提供してくれます。その印象は、奇妙なことに、まぜこぜになっているように見えますが、しばしば、もし注意深く追求すれば適切な道に導いてくれるような気高い思いの足跡や歩みであることに気づきます。架空の喜びには大きな歓喜そして架空の悲惨さには非常に陰惨で衝撃的なものがありますので、体が無活動状態であるために睡眠を死のイメージとみなすきっかけとなりますが³⁾、空想が活発であるので、私たちは消えることのない強烈な暗示を受けます。

両親がいやというほど夢見た世界に登場し、彼自身夢を見るまずまずの特性を備えていたアレクサンドロス大王が、しばしば「睡眠は自分が死すべき者であることを分からせるものだ⁴⁾」と言ったことを私は不思議に思います。

昼間に夢から注意をそらすような活動領域を持っていない私は、体が静止しているときの心の動きにはその能力にふさわしく、また、私たちをお創りになった永遠に続く神のお力を示す広大な考えがあることを明確に理解します。もしアレクサンドロス大王が言った睡眠中の不思議の真の意味を理解すれば、彼がこの小さな地球を征服したことは取り上げるに値しないことは間違いのないところです。クルティウス・ルフスのいくつかの行為と私自身の夜間記録の行為とを比べて見ると、私の方が英雄に見える我慢心ではなく断言できるかも知れません⁵⁾。

私たちは覚醒しているときは、好きなように考えをめぐらすことが許されていますが、睡眠中はそうはいかないのだと述べて本日のテーマを締め括りたいと思います。空想に襲い掛かる考えは、私たちに選択の自由はなく、その日の出来事や気分からか何らかの神の指示から生じます。

想像力は睡眠中には変質しますので、その日の行為がささやかな報いを受けたり罰せられたりするのは確かです。聖オースティンは、もし天国において現世のように睡眠と覚醒の移り変わりがあれば、天国の住民の夢はとても幸せなものになるだろうと考えました⁶⁾。

今のところ、夢は覚醒中の思いと一致しますので、私たちの思いを楽曲や遠方の友との会話、あるいは、それまでに心に宿ったその他の気晴らしに伝えることが可能です。

わが読者のみなさんは、これをヒントにして、心から素敵なお夜を迎えたいなら、素晴らしい一日を送る必要があるとお分かりいただけることでしょう。

3) オウィディウス『恋の歌』2.9.41参照。

4) プルタルコス「アレクサンドロス伝」22.3

5) クルティウス・ルフス『アレクサンドロス大王の歴史』全10巻。

6) 聖オースティン(アウグスティヌス)はカンタベリーの初代大司教(601-604)。ローマの修道士で、イングランドのキリスト教化に尽力した。

私はしばしばマーシャの祈りやカトーに関するルーシャスの話を、この観点から考えることにしています⁷⁾。

マーシャ：ああ、正しい人をお守りくださる不死の神よ、
 臥所の周りをご覧になって、睡眠を穏やかなものにして、
 悲しみを追い払って、安らかな夢を見させて魂を静めてください。
 そうです。あらゆる美德を思い出してください。
 人々に善意を施されるのをお示してください。

ルーシャス：徳高い人の眠りは甘美だ。ああ、マーシャよ、
 私は君の神のような父上にお会いしたのだ。
 何らかの目に見えない力が彼の魂を支えて、
 魂はいつもの高貴さを失わないで耐えている。
 優しいすがすがしい眠りが彼に訪れる。
 彼は安心して体を伸ばし、空想は楽しい夢に包まれて
 さ迷っていた。私が彼の臥所に近づくと、彼は微笑み、
 カエサルよ、お前には私を傷つけることは出来ないと叫んだのです。

シャドウ氏は追伸で、最初の手紙に続くこの幻のタイトルはないと言っていますが⁸⁾、これを書いた紳士は非常に気の利いた夢を見ますので、その手紙の趣旨を読み返して、みなさんにお伝えするために、ウェルギリウスが睡眠について素晴らしい隠喩的なイメージを与えている楡の巨木の下で⁹⁾、そのうちいずれかの夜に彼と会えれば嬉しく思うと付け加えています。

第594号 1714年9月15日（水曜日）

【アディソン】

そこにいない友人が中傷されたり攻撃されたりしている際に、
 弁護も出来ずに、人々から笑われている時、
 小知恵ある男といわれたいばかりに、見ないことまで捏造して、
 心に秘めておくことなどできない奴は、腹黒い。
 ローマの市民よ、そんなのには気をつけられるがよいだろう。

(オウイディウス)¹⁾

人生における腹立たしいことを寄せ集めて見ますと、その大部分は互いにまき散らして

7) アディソン『カトー』5.3.9-13, 5.4.27-34。

8) 第587号参照。

9) ウェルギリウス『アイネーイス』6.282-4

1) ホラティウス『諷刺』1.4.81-85

いる中傷や非難から生じていることが分かります。ほとんどの人が幾分かこの罪を犯しています。しかしながら同時に、お互いに接しているのですが、正直に言って、誰もがごぞつて中傷や非難をすることで悪名の高い人たちの悪口を言います。これは一般的に、人々に対する悪意、自分が高く評価されたいという私的な意向、機知の誇示、世の中のことが分かっていると思われたい虚栄心、あるいは、交際する相手の気持ちを満足させたいという願望から生じます。

中傷を口にする人は程度の差はありますが人々にとって憎むべき存在であり、前述の何らかの動機に動かされていますので、元来犯罪的なのです。しかし、こういった偽りの噂を流す動機が何であれ、相手に等しくとても有害な結果をもたらすことを考慮すべきです。中傷の発端が異なっても、それがもたらす危害は同じことなのです。

自分自身の考えや行為について判断を下すとき、誰もが自分にとっても甘くなりますし、至る所で飛び交っておりながら例外なく非難されているこの忌まわしい行為にやましいと思う人はほとんどいませんので、私は三つのルールを定め、ここで述べています悪癖から無罪放免される前に、そのルールによって自らの心を検証してもらいたいと思います。

第一のルールは、自分は他人の欠点を聞いて楽しいかどうか考えて見ることです。

第二のルールは、自分はこういったささやかな悪口を信じ易く、温厚なことよりも無慈悲なことを信じ易いかどうかということです。

第三のルールは、自分は他人の不名誉となるような噂を進んで広めるかどうかということです。

この悪徳が発生し、誹謗や中傷になっていく段階がいくつかあります。

一点目は、自分は他人の欠点を聞くと喜び、嫌というほど自分は中傷には無縁だということを示し、その結果、この悪徳の根源が自分の中に宿っていることです。もし他人に向けられた非難を聞いて喜ぶ場合は、その非難を口にするときにも同じように喜びを覚え、交際する誰もが自分と同じように喜ぶものだと考えて、進んで喋ることになります。それゆえ、自分の心から、他人の不名誉となる話に耳を傾けることで絶えず増長し煽られるこの犯罪的な好奇心を払拭するように努めなくてはなりません。

二点目は、自分はこういったささやかな悪口を信じ易く、温厚なことよりも無慈悲なことを信じ易いかどうかということ自分の胸に相談すべきだということです。

こういった好奇心は本来とても邪悪なものであって、一般に、自身の密かな墮落を意識していることから生じます。偽善と真実は、耳と目のように大きくかけ離れたものだというタレスの素敵な格言があります²⁾。これによって、タレスは賢明な人は自分が見ていない行為の噂を簡単には信じるべきでないということをほのめかしているのです。この点に関しては、フランスの小冊子で出版されています、トラピスト修道会の会員たちが守ったいくつかのルールについて触れたいと思います³⁾。

2) ストバイオス『詞華集』3.12.14

3) アンドレ・フェリビアン『トラピスト修道院について』(パリ, 1689)。

トラピスト修道会の修道士たちは卑劣で犯罪的な行為には耳を傾けないように、つまり、出来るだけそういった話は遠ざけるように命じられています。でも信じないではいられないほどうまく出来た話を聞いた場合は、彼らはその犯罪的な行為はそれを後ろめたく思っているその人の善意から生まれたのかも知れないと思うことになっています。このことはおそらく行き過ぎた行為に慈悲心をかけることとなります。意地の悪い人たちのように、それが公平な善行までもが悪意から生まれるのだと考えることよりもはるかに感心なことであるのは確かです。

三点目は、他人の不名誉となる噂を広めることが自分の密かな意図なのかどうかを胸に手を当てて考えてみるべきだということです。

以上私が述べて来ました心の病が悪意から生じるときには、それは最悪の症状となり、不治の病となる危険性があります。それゆえ、人間性あるいはごく普通の分別が欠けていない人なら誰でも非とせざるを得ないこの罪悪感について強調する必要はありません。この種の噂を広めることにどんな喜びがあろうとも、その人は秘密を胸の中にしまっておくことによって、誘惑を克服することには無限の満足感があることに気づくのだとだけ付け加えておきます。

第595号 1714年9月17日（金曜日）

【ティッケル】

野獣が家畜と仲良く暮らしたり、蛇が鳥とつながったり、
子羊がライオンと交わったりすることが許されてよいと
いうわけではない。(オウィディウス)¹⁾

並みの能力のある著者が謙遜して思ったままを書き記すと、少なくとも理解できるとのほめ言葉が与えられるでしょう。しかし、実際には、彼らは馬鹿げたことを書こうと骨折り、文体をわざとらしく飾り立てることで、すっかり彼らの目指すささやかな分別を隠蔽してしまいます。文筆業界には私がここしばらく矯正しようとして来た苦情の種があります。そこで、本日の紙面を公正さのためにあてることにしました。私が言いたいのは、教養のない人には例外なくありますが、教養のある人にもしばしば見出される欠陥である「無定見な隠喩の混在」ということです。

この点をすべての読者に分かり易くするために、まず、隠喩とは、簡単に言えば、人の考えを五感に影響を与える類似物やイメージで伝えるための直喩なのだと言っておきます。世の中には、それぞれ別個の視点を与えて考えて見ると、何らかの物と比べることが出来ないものは何一つありません。言い換えれば、同一の物でもいろいろな隠喩で表現できる訳です。しかし、厄介なことに、稚拙な著者はこういった隠喩に対して馬鹿げた使い方をするために、直喩にはならず、ふさわしいイメージもうまく似せることも出来ず、混乱や

1) ホラティウス『詩の技法』12-13

曖昧さや雑音となってしまいます。そういう次第で、そのすべてあるいは一つ一つは激烈とか勇気とか力とかを示す適切な隠喩なのですが、英雄が稲妻やライオンや海に例えられた例があるのを承知しています。しかしその取扱いが稚拙なために、稲妻は層雲から溢れ出てしまい、天からライオンが駆け出して来ますし、リビアの砂漠から大波が寄せて来ることとなります。

こういった例が馬鹿げているのは明白です。相反する隠喩が寄せ集められるたびに、多かれ少なかれこの過ちを犯すこととなります。隠喩は五感に影響を与える物事のイメージだということはすでに触れました。それゆえ、視覚に入るものから選ぶイメージは聴覚に当て嵌めると必ず不一致が生じます。その他の感覚に当て嵌めた場合もそうです。自然界の生き物あるいは人為が元々出来ないようなことを隠喩的な状態で行うと考えるのは間違いであることは言うまでもありません。物議をかもし著者たちの著作で一度ならず読んだことがある例を引いて、私が言っていますことを説明したと思います。ある名高い著者は、ペンから痛烈な非難が途絶えたなどと語りました。しばしば苦々しさがペンから途絶え、風刺で打ち据えられているのだと聞いたことのあるこの紳士はこれを手にする決意をして、そういった無意味なことを言ったのだと思います。実際に描写されているこういった隠喩やイメージを考えて見ると、これらがひどい状態で結びついていることがいかに馬鹿げているかが非常によく分かります。手がペンを握っており、鞭縄の鞭がそのペンから繰り出されているのを想像して見てください。そうすれば、この雄弁が実に見事に描写されているかが分かります。まさにこのルールによって、読者はあらゆる隠喩の結合でも判断し、どれが同質でどれが異質か、もっと簡単に言えば、どれが調和しておりどれが調和していないかを判定することが可能だと思います。

気を付けなくてはならない害悪がさらにもう一つあります。それは隠喩が単調で退屈な寓話に走ることです。これは上手な書き手の場合は過ちで済みますが、そうでない場合は大きな混乱を引き起こします。一つの言葉の輝きが作者を道からそれさせ、そのページの主題からはずれさせてしまうときには、これはひどいこととなります。この手合いの若者のことを記憶しています。彼はたまたま恋人がとても魅力的だと語った後で、その期に乗じて彼女を極寒と灼熱の地帯を持っている人と考え、その両極から彼女につきまとったのです²⁾。

本日の紙面はこのひどい文体で書かれた手紙で締め括りたいと思います。この手紙によって、読者はこれがいかにひどいかが分かって欲しいものと思います。この手紙はこれまでとても称えられましたが、読んでみると、賞賛出来るものでないことが明らかです。

前略

貴殿はペンで厳しい鞭を数多く降り注ぎましたので、その見返りとして、当然のことながら小生の「インク」が貴殿の両肩に塗り付けることができるあらゆる「荷物」を期待なさ

2) おそらくカウリーの詩「ザ・リクウェスト」の連想。第62号参照。

るかも知れません。貴殿は小生が誰であるか、また、小生がこの調子で「吸い玉で取られ」「酷評される」に値するかどうか分からずに、「ビリングズゲート」で「掻き集める」ことが出来るようなありとあらゆる失礼な言葉を「四分」なさっておられます。きっぱり言いますが、貴殿は好きなどころに「目」を向けてください。でも、どうしても小生のことを「嗅ぎ出す」ことは出来ません。貴殿が教区に「撒」かれている「恐怖」が果たして貴殿の栄誉の記念碑を「建てる」とお考えですか。そんなことはないのです。貴殿は気が済むまでこういった戦いをなさるかも知れませんが、「収支決算」をして見ますと、貴殿が荒海で「魚釣り」をしているのだということ、そしてまた、イグニス・ファウヌスが貴殿をうろたえさせているのだということ、さらに、貴殿が実際には砂地に「建物を建て」いるのであって、「まるでお門違いなさっておられる」ことに気づかれるでしょう。

草々

第596号 1714年9月20日（月曜日）

【バジエル】

私の優しい心は傷をあっさり受け入れる。(オウイディウス)¹⁾

つぎの手紙を送って来た寄稿者には、それをお示ししない限り読者が喜ぶかどうか分からないほどのとても風変わりなものとなっています。

拝啓

私は心の底からこの世にはしつこい恋人ほど無礼な生き物は存在しないと確信している次第です。私たちは日々まったく関係のない人たちに自分たちの運命の過酷さについて不満を言っています。そして、みなさんも私たちの生活の苦しみを味わっているのだと納得して、しきりに気持ちを持ち直しているのです。このように考えているのですが、私自身の事例について貴方にお知らせしないではいられません。ご承知いただきたいのですが、私は幼少時のときにも気づいていたのですが、最も支配的な性向は女性によく思われたいという強い願望なのです。私は現在21歳であり、もしかなりな資産家で世間では慎重な人として通っていた父が「早婚ほど若者の資産を台無しにするものはない」、そしてまた、「男は26歳まで結婚を考えるべきでない」という格言を定めていなかったら、長年ベッドを共にする相手を選んでいたはずで、結婚に対する男の気持ちが分かっている私は、身を固めることを望んでいる身分のある女性に自分の心を傾けても無駄だと考えました。そこで、それ以来、財産のない女性を相手にして来ました。ところで、自分のことをうまくお伝えする方法が分かりませんので、自分史をお伝えすることにします。

女の先生たちに対しては、休暇となるといつでも私は朝寝坊する先生のところに行き、「夫と妻」という芝居では最初に名乗り出ました。この女性によく思われたいという気持

1) オウイディウス『名婦の書簡』15.79

ちは年齢を重ねるにつれて強くなりました。ダンス教習所では、お気に入りのパートナーを選ぼうとして同級生たちと何度も喧嘩をしました。舞踏会の夜には、母親たちがやって来るまでに、私はいつも鼻血を出していたのです。分別のある父は間もなく私をこの軟弱な学校から厳しい学校に転校させました。その学校でラテン語とギリシア語を学びました。この学校ではいろいろな厳しさを体験し、やっと大学に行くにふさわしいと考えられたのでした。実を言えば、学問の府にはもっと早く辿り着いておくべきでした。私と先生の家政婦との密通が発覚したのです。彼女に対してとても効果的に美辞麗句を並べ立てましたので、彼女はかなりな年嵩でしたが、もう少しで結婚を同意させるところまでの仲になっていました。オックスフォードにやって来たとき、論理学は無味乾燥だと思い、私はすぐに死者に注意を払う代わりに生者に言い寄り始めました。最初の相手は私がパルテノペと呼ぶ奇麗な女性でした。彼女の母は町の城壁の傍でエールを販売していました。私たちがそこで逢引している様子をしばしば学生監に見つけられましたので、愛人の評判に傷をつけないために、とうとう私の求愛は本気なのだ打ち明けざるを得なくなりました。しかし、パルテノペはやがて靴屋と結婚しましたので、私は再び我慢の生活となりました。つぎの相手は洋服屋の娘でしたが、彼女は若い散髪屋を選んで私を捨てました。この不幸についてある気難しい友人に語ると、その非情な男は私の不幸をからかって、笑いながら「羅針が柱以外のどこへ振れるというのか」²⁾と言うのでした。その後、私は婦人帽販売人、そして最後には寝室係に惚れ込みました。その時点で私は追放、つまり、大学の言い方をすれば、無期停学処分を受けたのです。

家に帰って来ると、真剣に勉強に取組み、大きな影響を受けた仲間から離されたことでもっと落ち着いた生活となりました。そのため、父は私をテンプルにやらしてみようと考えました。

テンプルにやって来て1週間しないうちに、私は再び輝き始め、好ましく思わせるものはお金以外ならすべてが揃っているととても奇麗な女性に夢中になりました。恋心が吹き込むありとあらゆる甘い言葉をしきりに口にしましたので、やがて結婚の同意を取り付けました。しかし、私たち全員にとって不幸なことに、彼女がいないときに、私はいつもこれもまた大変な美人である彼女の姉に同じ言葉をかけていたのです。観察者様、言って置きますが、これは彼女に対する真の愛情からではなかったのです。男性との会話にはまったく不慣れであり、女性との交際に強く溺れています私は、恋の言葉以外は知らなかったのです。しかしながら、もし貴方のお力で私が現在陥っています困惑を取り除いていただければとても嬉しく思う次第です。私は先だって田舎の老紳士に向かって、妹さんに熱烈な恋をしていると知らせたところでした。気の毒なことに、同じ郵便で彼女の父親は私がしばらくの間姉に言い寄っていたのだということを知ったところでした。すると、短気なこの紳士は私の功績はいろいろ耳にしているので、直ちに南海に送り付けてやる積りだと知らせて来ます。私は時折死について喋りすぎているので、死は取り立てていほどのこと

2) 柱は、一般的に、理髪店の標識だった。

はないと思うようになっていきます。もしこの老郷士が彼の意図に固執するなら、絶望的な恋人を破滅させる適切な方法を準備しているところだと知らせてやります。それゆえ、彼には注意して、強情を張ると彼自身は彼の力のある義理の息子を、世間は有望な弁護士を、私の恋人は情熱的な恋人を、そして貴方は観察者としての地位を失うことになることを考えさせてあげてください。

敬具、ミドルテンブルにて
9月18日、ジェレミー・ラヴモア

第597号 1714年9月22日（水曜日）

心は自由かつ抑圧されずに振る舞う。(ペトロニウス)¹⁾

わが友シャドウ氏から手紙が届いて以来²⁾、数名の寄稿者から睡眠中の様子や月が輝いている間に、脳内ではいかに注目すべき冒険をするかについての報告を受けています。読者をもっと要を得た夢に慣れてくれることを期待して、その中でも突飛なもの 요약をお示ししたいと思います。

自分のことをグラディオと呼ぶ人物は、恋人から自分の移り気を責められ、自分の誠意に見合う優しさの半分しか見せてくれないのだと不満を漏らします。このグラディオは武勇と策略によって、暴君や妖術者や極悪非道な人や騎士たちを数知れず死刑に処したことがあります、恋人の身の安全を守るためにはいかなる危険にも身をさらすのです。追伸で、彼は二人の間が絶えずうまく行っている、最後に恋人の尊敬を勝ち取ることはならないのだということを知って貰いたいと記しています。

話がとても冗長な別人からは、海外で投機的事業をしたことがあり、ある夜機に乗じて同行し、突然インド諸島で一番の金持ちになった夢を見たとの報告がありました。その地に住んで1、2年したころ、窓を無理やり開けるほどの突風が吹いて、故国まで連れ戻されたということです。6時に目が覚めたのですが、気分がすぐれなかったため、彼は二度目の航海に出るために体の左を下にして眠りに就きました。だが船には乗れたものの、不運なことに馬泥棒の罪で逮捕され、裁判で有罪を宣告されました。もし誰かが部屋に慌てて入って来て救い出してくれていなかったら、処刑される可能性が十分あったのです。この人物もまたシャドウ氏の助言を必要としています。シャドウ氏ならおそらく彼に最初に目覚めたとき喜んで起き上がり、自然現象としてそれに満足するようにと告げるに違いありません。

三人目は公共心のある紳士です。この紳士は9月2日の夜、全市が火事になり、もし自分がニューリバー³⁾を背負って駆けつけ、炎が辺り一帯に広まるまでにうまく消していな

1) ペトロニウス『サチュリコン』104

2) 第586号参照。

3) 第5号参照。

かったら、今頃市は確実に灰燼に帰していたのだと言っています。彼には市長および参事会員に報酬を要求する権利があるかどうか知らせが行くことでしょう。

9月7日付けの手紙は、運試しをする決意をした筆者がその日は一日中断食をし、有難いウェディングケーキを一切れ手に入れ、うまい具合に枕の下に置いたので、夜確実に素敵な夢を見るだろうと知らせて来ています。朝になって見ると、彼の記憶はたまたま彼を失望させるものであって、自分がそのケーキを食べたという奇妙な夢しか思い出せませんでした。探して見ると、ケーキ屑が少し残っていたので、彼はこれにはおそらく何らかの真実があると信じて、つぎの機会にはもっとしっかり夢を覚えておく決意をしています。

かなり多くの非常に楽しい夢見る人から数多くの苦情を受け取っています。彼らは私に例の騒々しい奴隷のような連中を黙らせる方法を考えて欲しいと言っています。彼らは仕事で町中を朝早くからうろつき回り、大変な迷惑をかけ、住民に妙な混乱を生じさせているという訳です。専制君主の中には、私に敬意を払って、馬車のガタガタという音や手押し車のゴロゴロという音のため、自分たちが何度も王座から振り落とされたのだと言って来ている人たちがいます。多くの公職についていない紳士が3ペンスにも値しない連中から広大な地所の邪魔をされているのが分かります。美しい婦人が今まさに若く、ハンサムで、裕福で、聡明な貴族と結婚しようとしたそのときに、そばを通り掛かった生意気な鋳掛屋が結婚に異議を申し立てます。光栄なことに最近昇進したばかりの希望に満ちた若者は、近所の靴屋のせいで、古い歌と引き換えにすべてを諦めざるを得ませんでした。この取るに足らない連中は結婚を解消したり、資産を食物にしたり、裕福な連中を貧乏にしたり、偉人を破滅させたり、征服する中で美人の邪魔立てをしたり、勝利を手に入れる中で大将の妨害をしたりするだけだということです。乱暴な行商人が街路を通り抜けると必ず、6名の王や君主を目覚めさせて、店を開かせ、靴を磨かせ、しばしば笏をシャベルに、布告をちらしに変えてしまいます。手元に若い政治家の手紙がありますが、この若者は5、6時間すると、ヨーロッパの皇帝になり、トルコ皇帝と戦争をし、馬と歩兵隊を蹴散らし、コンスタンチノーブルで世界の統治者となりました。この大出世の結末はつぎの通りでした。今月12日、朝7時頃、皇帝陛下は煙突掃除人によってその地位を追われたのです。

一方で、数多くの不幸な人から感謝状が届いています。彼らは不幸からたびたび救い出されたのはこの騒々しい連中のお陰だと考えています。小柄な石炭商は打ちひしがれた紳士の一人を目覚めさせることで、10年の禁固刑から救い出したのです⁴⁾。誠実な夜回りは他人に大声でお早うと挨拶をすることで、強力な敵の悪意から救い出し、敵方の目論見を無力にしました。病弱なある人はしばしば耳障りな御者の声で喉の痛みが治り、古靴の音で痛風の発作から救われたのだと打ち明けています。一晩中真面目な紳士を苦しめるうるさい青二才は燃え殻拾いの女の一声で黙ったのです。

4) ここには音楽への言及はないが、ニコルスたち編集者によると、これは音楽好きな小柄の石炭商トム・ブリトンへの言及だと考えている。ブリトンは本号が発行されて間もなく死亡した。

それゆえ、私はこういった人々を押さえつけないで、読者には彼らの朝の挨拶を最大限に活用するように提案いたします。名高いマケドニアの君主は、幸運の最中に身のほどを忘れることを恐れて、毎朝若者を仕えさせ、人間であることを忘れないようにと言わせました⁵⁾。こういった呼売り商人の一人によって目を覚ます市民は、この呼売り商人を一種の思い出させてくれる人と考え、そうでない夢を見るのをやめて、現に置かれている状況にうまく適応する準備をするために、一晚中見逃して来た状況に復帰する頃合いだと彼に知らせるまでになっています。

人々は好きなだけ夢を見るかも知れませんが、私は太陽が照っている間に起こらない架空の冒険には関心を示しません。そういう訳で、私は先週日曜日の教会でのフルシアの夢をもみ消します。ほかの会衆たちが素晴らしい説教に耳を傾けている間、彼女は芝居でのある紳士が原因で金と宝石を失っていたのです。そして、奇妙な不連続きで、とどのつまりは三人の可愛い子供たちを質に入れる羽目になりました。彼女が子供たちを捨てたときには、相手は本性を表して立ち去りました。結局のところ、彼は善良な婦人が夢中になったたった一本の酒瓶に過ぎないことが分かり、牧師さんの時間に関する第三の説教に耳を傾けることになりました。

もし架空の状態から突如現実に移る気がない場合は、その人はしばらくの間、夢判断をする寄稿者が自分を理解するようにと指図している目新しい考えに耽ることになるかも知れません。睡眠中であれ覚醒中であれ、空想を極端にまで追求しますと、落着いて穏やかなものでないときには、喜んで受け入れる物だけを楽しむために理性に従った行動をすることが空想を矯正する適切な方法となります。

第598号 1714年9月24日（金曜日）

【アディソン】

今、あなたは同じ目的を追求しているが、
方法が異なっている二人の賢人を称えないだろうか。
痛ましい時代を、一方は哀れみ、他方は侮蔑する、
一方は愚行を嘲笑い、他方は犯罪を嘆き悲しむ。(ユヴェナリス)¹⁾

人間は陽気な人と真面目な人に分類出来ます。生来、一方は憂鬱な不機嫌さに、他方は突拍子もない無思慮に流れる性向がありますが、双方ともそれぞれの気質を退化させて極端に走らない限り、人々に好印象を与えます。

陽気な人はとても愛想がいいものです。彼らは時と場所を選んだ会話では快活さを撒き散らしますが、その一方で、あらゆる会話に無味乾燥な浮かれ騒ぎを混入し、陽気さにふさわしくない話題を嘲笑に変えてしまいますと、大きな憤りを招いてしまいます。なぜな

5) マケドニアのフィリッポス。

1) ユヴェナリス『諷刺』10.28-30

ら、笑いは哲学者から理性の特性と考えられています、行き過ぎた笑いは常に愚かさの印と考えられているからです²⁾。

一方、真面目は、これに快活さと人間性が伴っており、相手の上機嫌さをタイミング悪く覆い隠してしまわない限り、美点となります。

これら二種類の人たちはそれぞれの個性を発揮しますが、互いに生来の嫌悪感とか反感を抱く傾向があります。

よくあることですが、真面目で謹厳な道徳の持ち主が若くて陽気な人たちの虚栄と愚行について詳細に語っているのを耳にします。真面目な人たちは自分たちに欠落している華やかさや娯楽をある種恐怖の念を込めて見詰め、引き付けられ過ぎますと不埒だと考える訳です。

私はバクスター氏が自身の人生について語る文章を読んで笑いを禁じ得ませんでした。彼はその中で、若いときにかろうじて宮廷の職に就くのを免れたのは大きな祝福だと言っているのです³⁾。

実際には、軽率さというものは人々の警戒心を取り除き、魂に襲い掛かって来るいかなる誘惑に対しても扉を開くのだということを認めなくてはなりません。軽率さは悪徳の接近に好意を示し、美德の抵抗を無力にします。このため、エリザベス女王時代の名高い政治家は、宮廷と公の仕事から引退した後、宗教の職務に専念しました。旧友の誰かが訪れて来ると、彼はいつも「真面目にやりなさい」という助言を与えたのです⁴⁾。

この気質を持ったイタリアの著名な著者は、真面目で落ち着いた気質の大きなメリットを口にして、大真面目に、人々のために自分がトロフォニオスの洞窟を所有したいものだと言います。彼が言うには、この洞窟はヨーロッパのあらゆる感化院や矯正院よりもマナーの改善に貢献しているとのこと⁵⁾。

この洞窟については、パウサニウスにとっても詳しい説明があります。彼によると、洞窟は巨大なかまどの形をしており、特別なしつらえがいろいろあり、ここに入る人は普段よりも物思いに沈み思慮深くなり、その後もずっと笑うことはなくなるというのです⁶⁾。もし誰かがいつもより憂鬱にしていると、その人に向かってまるでトロフォニオスの洞窟から出て来たところのようだねと言うのが当時のならわしだったのです。

一方、もっと陽気な気質を備えた著者はもちろん真面目な著者に辛辣です。そして、彼らには機知とユーモアを振りかざして攻撃するのだという真面目な著者に勝る利点があつ

2) 第249号、494号参照。

3) 『バクスター遺稿集』(1696)。リチャード・バクスター(1615-91)は清教徒の聖職者で、王政復古期に教会問題に手腕を発揮した。

4) セシル家のモットーとされている。

5) トロフォニオスについては、第503号参照。トロフォニオスはアポロ神殿を建てたと伝えられる建築家。死後英雄として祀られ、ボイオティアのレバディア近くの洞窟にそのお告げが授けられる神託所があった。洞窟は恐ろしい場所として知られ、ここで神託を受けた者は青ざめた顔で帰って来たという。

6) パウサニウス『ギリシア案内記』9.37.5-7。パウサニウスは2世紀のギリシアの地理・歴史学者。

あります。

結局のところ、もし気質を自由に操れるのであれば、いずれかに属することにはならないものと考えます。なぜなら、申し分のない性格というものは陽気さと真面目さんの両者から形成されるのですから。隠者になるのも道化になるのも望まないに違いありません。人間性はいつも塞ぎ込むほど惨めなものでもなく、いつも陽気でいられるほど幸せでもありません。要するに、この世に神がないかのように生きるべきではありませんし、同時に、この世に人がいないかのように生きるべきではありません。

第599号 1714年9月27日（月曜日）

どこを見ても暴動と歎きと恐怖が渦巻いている。（ウエルギリウス）¹⁾

年を取るにつれて、私は若い頃受け入れることのなかったちょっとした放縦をするようになりました。その中に、55歳のときに始め、その後3年間続いている午後のうたたねがあります。こうすることで、朝が2回訪れ、1日に2度起きて爽やかな気持で思索に耽ります。たまたま私にとってとても幸運なことに、わが国の人々のためになる夢があったのです。そこで、私は公共のために目覚めているだけでなく眠っているのだと言えるかも知れません。昨日、私はすでに読者のみなさんにお伝えしたトロフォニオスの洞窟について思いを巡らしていました²⁾。いつもの眠りに就くや否や、この洞窟を手にしており、余生を真面目に過ごしたいと思っている人たち全員を招待して、この美德を伝えている夢を見ました。瞬く間に、大勢の人たちが私のところへ押し寄せて来ました。最初に試みたのは道化者³⁾でした。彼は放蕩生活から更生するために、近所の治安判事によって送り込まれたのでした。哀れな「塩漬けニシン」⁴⁾は洞窟を一巡りしないうちに、まるで独居房から出て来る隠修士のように、悔い改めた痛ましい表情を浮かべて洞窟から出て来ました。つぎは、若い陽気な洒落者を目にしました。この若者が引き返して来るのを見て、いかがでしたか、と笑いながら彼に尋ねました。すると彼は、どうかそんな無礼な言い方はやめてくださいと応じて、判事のように厳粛にもったいぶって私のそばまで近づいて来ました。つぎに、市民が妻を入れてやって欲しいと頼んで来ました。彼女は私が今までに見たことのないような華やかな色のリボンを身につけていました。彼女は扇をひらひらさせ、作り笑いを浮かべながら入って行きましたが、女神ウエスタに仕える処女のように厳粛な面持ちで出て来ました。そして、彼女は女性の装身具を投げ捨てて、心から喪に服し、今後は黒服で過ごすことにしました、と私に向かってため息交じりに告げるのでした。両親や夫や恋人たちから大勢の男たちが託されていまして、彼女たちが出来るだけうまく気を紛らわすことを願って、全員一緒に入れてあげました。彼女たちが再び太陽の下に姿を現

1) ウエルギリウス『アイネーイス』2.368-9

2) 第598号参照。

3) 「道化者」については、第35号参照。

4) 「塩漬けニシン」については、第47号参照。

わたしたのをご覧になれば、私の洞窟は尼僧院だったのではと思われるに違いありません。誰もが黙り込んで、模範的な礼儀正しく、まるで信心深い人たちの行列を見ているようだったのです。非常に啓発的な光景を大いに喜んでいきますと、笑い、歌い、踊っている男女大勢のグループが近づいて来ました。以前に長い間聞いたことのあるものでした。私がリーダーにどうしてここへ来られたのですかと尋ねると、彼らは一斉に自分たちは最近グレート・ブリテンにやって来たフランスのプロテスタントなのですと言いました⁵⁾。そして、自分たちはイギリスでは陽気過ぎると思って、イギリス人並みに心を落ち着かせるために私に救いを求めたとのことでした。私は直ぐに陽気さをなくしてあげると言い、全員を入れてあげました。彼らは洞窟を一巡りすると、非常に整然と、完全にイギリス人の表情をして出て来ました。その後、オランダ人を入れてあげました。彼は彼の言う「ケドラー」つまり、洞窟をとて見たがっていましたが、洞窟によって彼に何らかの変化が生じたのかどうかは分かりませんでした。

ユーモアの素質で大評判を博していた喜劇役者は、自分はどうしてもアレキサンダー大王の役をやりたい、自分の顔から笑いの造作を無くすことが出来ればうまく行くと思うと言いました⁶⁾。しかし、洞窟によってあまりにも硬直な表情になったために、今後は『アテネのタイモン』⁷⁾の役とか『吊い』⁸⁾の唾者の役しかふさわしくないのではないかと危惧しています。

つぎに参事会員の資格を与えるに、口先だけの突拍子もない市民を入れてあげました。彼のあとに続いたのはミドルテンブルの若い道楽者でした。この若者は祖母が連れて来ていました。祖母が非常に悲しみかつ驚いたことに、若者が出て来たときにはクエーカー教徒になっていました。私は無神論者や信心を嘲笑う人たちに取り巻かれていました。彼らは洞窟にいた真面目で思慮深い顔つきをした人たちを見てからかかっていました。私は彼らをつぎつぎに押し込み、ドアに鍵をかけました。ドアを開けて見ると、彼らは全員、まるで正気を失って脅えているように見えました。彼らは縄で手をしばって洞窟が見えるところにある森に向かって進んでいました。彼らは真剣な考えを抱くことが出来ないのだということが分かりました。しかし、彼らは直ぐにもっと素晴らしい考えを持つことが分かっていたので、彼らに満足のゆく変化が生じるまで、彼らを友人たちの保護下に置くことにしました。

最後にやって来たのは娘さんでした。彼女は私の短い顔を初めて目にすると、慎みなく笑い出し、母親が私に話しかけている間ずっと腹を抱えて笑いこけるのでした。そこで私は母親の話の腰を折り、娘さんの手を取って、お嬢さん、どうかお母さんと話をしている

5) 第180号, 328号参照。

6) ナサニエル・リー『好敵手女王』(1677)参照。

7) 『アテネのタイモン』は、パウエルがタイモン役で、1714年5月17日と6月16日に、ドゥルーリー・レイン劇場で上演された。

8) スティールの『吊い』は、1713年4月8日、5月11日、12月9日に、ドゥルーリー・レイン劇場で上演されたが、1714年には上演の記録は残っていない。

間、私の部屋に入っていて欲しいと言いました。そして、彼女を洞窟の入り口にある私の部屋に入れました。すると、母親は娘の失礼を詫びてつぎのように語りました。娘は父親や親戚の中で一番真面目な人にも同じように接しますし、悲劇の最初から最後まで友達と一緒に笑っています、それどころか、説教の最中でも時々突然笑い出し、みんなを驚かすのです。母親はさらに話を続けようとしていましたが、その時落ち着き払って腰を低くした娘さんが洞窟から出て来ました。彼女は溢れんばかりの陽気さを備えていたのですが、トロフォニオスを訪れただけで、並々ならぬ上品さを身につけたとても慎み深い女性になっていたのです。数知れない治療を施した後で、私はとても満足して辺りを見回し、患者が全員とても物思いに沈んだ思慮深い様子で歩いているのが分かりました。そこで、この場所はまるで哲学者たちで一杯になっているように思えました。私はようやく自分で洞窟に入ってこのような素晴らしい結果をもたらした洞窟がどうなっているか確かめて見ることにしました。でも、ドアがやや低くなっており、前かがみになりましたので、椅子にぶつかって目覚めてしまいました。最初の驚きから正気に返って、洞窟にほんの短時間滞在したことでスペクテイター紙を台無しにしたかも知れないということ以外には考えられませんでしたので、私に降りかかった出来事に大いに満足することになりました。